

## 3・11 東日本大震災

東海村水道事業協同組合

平成23年3月11日午後2時46分太平洋沖を震源とするマグニチュード9.0、日本国内において観測史上最大の東北地方太平洋沖地震が発生したため、私達組合員は地震直後から自主的に役場水道課にかけつけ今後の災害復旧に向けて打合せを行いました。

翌日、被災現場を見て愕然としました。その現場は久慈川の揚水機場から外宿浄水場まで送水する導水管、いわゆる東海村の水道の源となる部分でした。口径350mmの太い鋼管で出来ているその導水管が地震の強い衝撃で完全に切断されていたのです。地震のエネルギーの強さを改めて思い知らされました。

一刻も早くこの導水管を復旧させなければ村民への水の供給がほとんど出来ないばかりか、その後の復旧作業もできない。とはいえ、携帯電話等の電波状態も最悪で外部との連絡が取りづらく、作業はかなり困難が予想されましたが、幸いにして組合員の中に溶接の技術を取得している人がいましたので、他から連れてくることもなく作業開始から3日という早さで浄水場に水を送れる状態にすることができました。

その後も同様に役場水道課の職員と組合員で協力し合い、浄水場から各家庭へ水を送る配水管・給水管の漏水箇所の調査を行い、全員で復旧させることが出来ました。その修理箇所は200か所以上もあり、復旧作業は早朝から深夜まで及び、約二週間連続しました。また、雨の日でも放射能汚染の心配をしながら復旧作業を続けておりました。作業現場で苦労したことは、作業車・重機等の燃料の確保、管材料の確保、埋め戻し用の砂・碎石の確保等、また、復旧作業当初のうちは食べるものもなく空腹の状態で作業を続けたことでした。でも、住民の方々の「がんばってください」とか「ご苦労さまです」、「昨日から水が出るようになりました、どうもありがとうございます」等の暖かい励ましの言葉をいただいてやり遂げることが出来たような気がします。

今回の震災では、大変大きな被害を受けましたが、今後、このような揺れに対する水道管の耐震化を今までも増して行う必要があると思います。



取水場付近の導水管

提供：役場水道課

# 東日本大震災を体験して思うこと

東海村役場 企画政策部政策推進課 鈴木 亮一

平成23年3月11日（金）午後2時46分、小刻みな揺れが長時間続き、これはいつもとは違うなと思った瞬間、今まで体験したことのない強い揺れが私たちを襲いました。いざ外を眺めてみると、役場周辺の家屋の瓦が次々と落ちていくのが分かりました。あまりの衝撃のせいでしょうか、今思えば随分と冷静に状況を見ていました。揺れが収まった後、あたりを見回してみると、足の踏み場も無いほどに課内の書類などが床に散乱していました。役場庁舎の状況に不安を感じたので、逃げ遅れた村民の方がいないことを確認しつつ、私は外に出ることにしました。と、ここまで時系列的に書きましたが、外に出てからの記憶が既に曖昧になっていますし、また所謂「本部テント（途中から本部詰所）」での経験を今後の防災対策に活かしたいという強い思いがありますので、この経験から感じたこと、考えたことを中心に以下に書き記します。

私は「本部テント」において、主に避難所と災害対策本部との連絡調整、給水車のオペレーターを担当しました。ここでまず「本部テント」について説明したいと思います。実は「本部テント」というのは、地域防災計画等の防災計画に位置付けられた組織ではありません。今できることは何か、今一番必要なことは何かを真剣に考える職員有志で作った任意の組織です。災害対策本部は災害時における村の意思決定機関であり、水が足りないとか、乳児用のミルクが無いといった案件を処理するための機関ではないと考えます。そういう細かな案件に即時に対応するため、「本部テント」を立ち上げました。これにより避難所との連絡調整がスムーズになるなど、災害対策本部の業務はかなり軽減できたはずです。今後策定される防災計画の改訂の際には是非、今回の「本部テント」的役割を担う組織を位置付けるべきであると考えます。

このように「本部テント」での体験を中心に書き記しましたが、本来であれば地域防災計画などに位置付けられた班（私は情報班でした）の業務に従事すべきであったことは十分承知しております。しかしながら、震災直後の混乱の中にあっては、今回の判断は間違っていなかったと思います。「今私たちができることは何か、今一番必要なことは何か」災害の現場にあっては一番大切な心得だと思います。

取り留めの無い文章になってしまいましたが、この体験記が村の防災対策の一助になれば幸いです。



舟石川コミセン

提供：泉 幸男

# 「東日本大震災と施設の損傷について」

東海村立村松小学校 校長 砂川 齊

3月11日今まで経験したことのない大きな地鳴りとともに、想像を絶する大きな揺れが学校を襲った。6時間目の授業が始まってまもなくのことだった。子どもたちは恐怖の中、とっさに机の下に避難したと聞いている。校内放送が停電で機能しなくなり、担任の指示で揺れが収まるのを待ってグラウンドへ避難した。全員が無事避難できたことが何よりだった。しかし、グラウンドは、大きな被害を受けた。引き続き起こる余震の中、教育委員会と防災無線で連絡を取りながら、揺れが収まるのを待った。午後4時過ぎ、親への引き渡しの指示を受けて、我が子を心配して来校した保護者に子どもたちを引き渡した。午後5時過ぎにはほとんどの子どもたちの引き渡しを終了した。引き渡しができなかった子については、避難所となった真崎コミセンで、校長と教頭がともに親の迎えを待った。午後9時30分過ぎ、最後の子を親に引き渡し、全児童の引き渡しを終えることができた。

幸いなことに、校舎の被害はほとんどなかった。しかし、校舎から南側への校庭の被害は甚大であった。低学年棟前の緑地は、南側へ地滑りを起こしていた。校舎と緑地の境目に、幅50cm、深さ30cm程の隙間があいた。また、緑地に数か所の地割れができた。緑地から校庭へ降りる階段は地面に押されて反り上がった。校庭は、やはり数か所地割れができた。液状化のためか、地震直後、地下から数メートル水が吹き上がった所がある。通用門に向かう道路の西側1メートル位が深さ1メートル程陥没した。教育委員会の素早い対応で応急処置がなされ、教育活動に支障はなかった。

地面が大きく動いたため、校舎周りに埋設されている上下水道にも被害が出た。上下水道の完全復旧にはしばらくかかった。

いままで安全だと思っていた校庭に大きな被害が出たのは、想定外であった。また、今回の地震は、津波による被害も甚大であった。本校の敷地南側には、村松川・農業用水路が流れ、本校は、標高13.5mの地点に立地している。津波の影響を受けることも十分考えられるため、本年度始めの避難訓練では、本校北側の108段ある階段の上まで避難するように考え、実施した。

また、今回の震災を受け、再度防災マニュアルの見直しを行った。



1メートル程陥没した通用門に向かう道路  
提供：本人



地割れができてしまった緑地

提供：本人

# 私の震災体験

瀬川 實

あれは、3月11日の午後2時40頃、書斎でパソコンのキーボードをたたいて友人にメールを書いているときだった。突然、ドーンと地鳴りがしたと思ったら、書斎がぐらぐら動き始めた。過去73年間に経験したことのない大型地震だなと直感した。

私は、買ったばかりの50インチの大型テレビが転倒しないかと心配になり、よろけながらリビングに直行し、テレビを両手で押さえ、胸に抱きかかえるようにして支えた。しかし、テレビは、ロボットのように動きだし、その動きを止めることもできず、ただ、テレビとともに部屋の中央近くまで50センチほど移動させられてしまった。

天井を見上げると、大型シャンデリアが激しく震動し、大きな音を立てていた。私は、心の片隅で、もうこの世の終わりかとさえ思わずにはいられなかった。地震はかなり長く感じた。

地震がおさまってからお勝手に入ると、テレビが高い位置から落下していたが、日頃から落下に備え何本もの紐を取り付けておいたため途中でぶら下がっていた。しかし、食器棚が倒れかかり、茶器類の大半が床に落ち、割れたガラスコップの破片などが散乱して足の踏み場もなかった。

書斎に戻ると、オーディオセットの上に載せてあったテレビが床面に落ちていたが、幸いに毛布などの上に落下していたため壊れることはなかった。各部屋の天井に設置されたエアコンが左右にわずかずつ移動し、隙間から天井がかすかに見えた。部屋の壁紙には亀裂が入り、玄関のコンクリート壁が割れて破片が散乱した。

次に、外に出てみると、屋根の瓦30枚くらいが盛り上がり、20枚くらいが剥がれて、1メートルくらいずれ落ちていた。一方、裏に回ると、お風呂とお勝手用の給湯器が45度位捻じれ、30センチほど手前に移動していた。

この時刻を境に、電気、水道が止まり、途方に暮れた。電話も使えなくなった。その日は、買い置きのペットボトルの水を飲み、ガスコンロでお湯を沸かしてカップラーメンを食べたり、パンを食べて夕食を済ませた。風呂にも入れず、ペットボトルの水を温めて体を拭いた。明りは一本のローソクで取った。世間の情報はラジオでしかとれず、福島があれほどひどく海水に傷められたことは、4、5日たって、電気が通ってから初めて知った。

翌日から、茶碗を洗ったり、トイレに流す水探しに大変苦労した。舟石川の墓地から水が出る情報を得て行ってみると、ポンプで吸い上げた水はコメのとき汁のように白く濁っていた。それでも、それで食後の茶碗類を洗い、使用後はトイレに使用した。

2日ほど経って、電話が通じ、水戸の友人から水を取りに来るよう連絡があり、喜んで貰いに行った。村内、村外を問わず、大谷石堀はどこでも破壊されていた。役場が水を配給していることを知るまでは、近くの山林から湧き出ている清水を汲んで来ては、食器洗いや、トイレに使った。

ある時、山林からの帰途、ある家の方が道路に看板を掲げて、ご自由に自宅の堀井戸水をお使いくださいと呼びかけて下さっており、我々、水に困っていた者たちは、神様からのプレゼントをいただくような気分をいただくことにした。

私は毎日、車でポリタンク10個分の水を頂きに通った。お陰さまで、風呂水、洗濯、トイレ、食器洗い用水に困ることはなかった。

ガソリンスタンドは、どこも長い行列ができ、500メートルから700メートルくらい車が並ぶ始末であった。1時間待たされても、直前で打ち切られたり、給油を受けられても20リットルの制限があり、外出は控えざるを得なかった。こんな生活が10日前後続いたと思う。ガソリンを自由にお買えるようになるまで20日ぐらいかかったように記憶している。

一方、スーパーマーケットでは野菜類を除いて、品不足がしばらくの間続いた。特に、乾電池やポリタンクが入荷されず、多くの村民が困った。

さて、ボランティア活動を活発にしている私達は、中央公民館が東海中の教室になったほか、倒壊の危険性がある合同庁舎も使うことができないばかりか、多くのコミセンも使えなくなってしまい、ボランティア活動を数カ月ほど休止せざるを得なかった。

次に、今回の災害で一番気になっていたことがあった。それは、常日頃、近くの廃屋付近で遭遇していた野良猫たちであった。あの大地震が発生してから数日後、現場に行ってみると、10数匹の猫の群れが私に絡み寄ってきた。みんなやせ細って眼だけが鋭い光を放っていた。

私は、早速、持参したキャットフードと水を与えた。彼らは、息をするのも忘れたかのように、がむしゃらに食べ始めた。あれから7カ月が過ぎたが、今も朝夕2回、餌と水を与え続けている。

今回の災害を通じて、災害はいつ起こるか分からないから、日頃何をしておくべきか、学習させられた。食糧、水の確保、ラジオ、電池などの用意、預金通帳、大事な書類などを誰でも持ち出せる用意など、家族みんなで常々、話し合っておく必要があることを痛感した。

最後に、東海村には、原子炉があり、福島のようなことがあったならば、我々は今のような生活はできず、東海村を離れなければならなかった。それを思えば、身の毛もよだつ思いがする。出来ることならば、原子力施設は、将来的に廃止の方向で進めて欲しいものである。



村松コミセン

提供：田所 洋一

# 東日本大震災を乗り越えて

照沼小学校父母と先生の会会長 関田 広信

平成23年3月11日、卒業式を間近に控えたいつもと変わらない風景でした。私の自宅は照沼小学校の目の前にあり、常に子どもたちの笑い声やチャイムの音が聞こえています。その日もいつもと同じでした。それが一瞬にして子どもたちの悲鳴や泣き声に変わってしまったのです。

午後2時46分、最初は小さな揺れがしばらく続き、いつもより長い地震だと思ったとき、その揺れは今まで経験したことのない破壊的な揺れへと変わり、二度、三度と襲ってきたのです。

駐車場に止めてある車は大きく揺さぶられ、今にも隣の車とぶつかりそうでした。アスファルトの繋ぎ目は離ればなれになり、隙間が見えていました。ブロック塀はあちこちで倒れ、屋根の瓦が落ちてきました。子ども達の下校時間だったらと思うとゾッとしました。

揺れが大分収まってきたところで学校に行くと、先生方の誘導のもと、児童全員が無事に校庭へと避難していました。

しかし、地震はまだまだ収まりませんでした。校舎左右の増築部分が大きな揺れとともに離れてはぶつかり、コンクリート片がバラバラと落ちてきました。これ以上大きな揺れがきたら校舎が倒壊してしまうのではないかと思えるほど心配になりました。

この状況では避難所としての機能は果たせないのは自明の理でした。近所の方々も学校に避難してきましたが、学校の状況を見て、また、村の放送によりコミセンへと向かうことになったのです。

子ども達は、先生方と近所の方の手伝いで作られた風よけのテントの中で保護者の迎えを待っていました。児童全員の迎えは夕方五時半過ぎに完了したとのことでした。普段、当たり前のように使っている携帯電話やパソコンは、こんな時役に立ちません。保護者同士の口伝で、また、ご近所とのコミュニケーションの大切さを痛感しました。

震災から約一週間、校長先生より校舎が使用不可能だと聞かされました。最初はショックでしたが、校舎が児童や先生方を最後まで守ってくれたのだと感謝の気持ちでいっぱいになりました。

第49回卒業式は近くの村松コミセンで行いました。限られた人数の参加ではありましたが、記憶に残る卒業式になりました。これからも頑張れ！第49回卒業生。

今、照沼小学校の児童は、バスで村松小学校へ元気に通っています。創立50周年記念式典も一年遅れではありますが、平成24年度内に挙行できることになりました。また、新校舎も24年度内に完成予定です。

最後に、震災後ご尽力くださいました村上村長様、高橋教育長様をはじめ教育委員会の皆様、村松小学校の皆様、地域の皆様、そして関係の皆様にご心より感謝申し上げます。



照沼小

提供：本人

# 大震災を経験して

瀬谷 友美

3月11日午後2時46分。

当時高校2年生で、ちょうど学校が休みだった私は、自宅の自室で音楽を聴いていました。曲のサビに入った時、自分の体が..いや、机自体も揺れていることに気が付きました。「いつもの震度3くらいの地震だろう」そう思った瞬間、ドドドド..という大きな音と共に、部屋全体が激しく揺れました。椅子に座っていた私は床に落ち、棚に並べてあった物が私を目がけて落ちてきました。「大きな地震」、そう理解するのに時間がかかり、気が付いたらケータイを片手に、「友美！下に降りてきなさい！」と階下のリビングから叫ぶ母の元へ行っていました。

その後は、まるで嵐のような時間でした。私は弟が通う小学校へ、母は妹が通う中学校へ、2人を迎えに行きました。小学校へ小走りで向かう間に見た光景は、信じがたいものでした。崩れ落ちた壁、亀裂が入り、液状化現象によりびしょびしょになった小学校敷地内のアスファルト。弟を連れて自宅に帰る頃には、停電により役に立たなくなった信号機と車の渋滞が目に入りました。

電気も水道もストップ。電気は2日間、水道は約1週間使うことが出来ませんでした。頼りになるのは電池式のラジオと懐中電灯。

そんな中、いちばん心強かったのはご近所さんとの助け合いです。「太陽電池でご飯を炊いたから、食べてください」「ありがとう、うちには缶詰めが沢山あるから、お礼にこれを受け取ってください」人の心の温かさが身に染みました。

今回の大震災で私が学んだことは、避難訓練に加え、人との繋がり的重要性です。助け合えたからこそ、この大変な状況を乗り越えられたのだと思います。



旧合同庁舎周辺 提供：坏 正樹

# 迷信「地震には最も安全な地帯」

高杉 信一

数年前、リコッティで、地震学者の某東大教授の『いつ来るか分からない大地震』（たしかこのような副題と記憶）の講演会があった。

阪神・淡路大震災時に大阪で激震を体験した身で、新潟震災では柏崎原発が被害を受けた直後でもあり、この講演会に臨んだ。

活断層と直下型地震については、縷々解説があったが、肝心のわが茨城地域に関しては、「調べてみたら、大きな活断層も無く、小規模な地震はあろうが、大震災の可能性は、歴史的に見ても少ないと思われる。」との締めくくりで、ああ、東海村は良いところだなと安心した記憶がある。

先達が、原子力研究所や日本原電を受け入れた背景にも、無意識のうちに、ここには大きな地震は来ないとの気持ちが働いていたのではないと思われる。

従って、日常の災害対策は、原子力災害に注目されており、水害を除いて、他の一般災害の備えは、必ずしも充分でなかったのが実態ではなかったかと思われる。

この震災の後で、日本原電東海原子力発電所が、茨城県からの過去の大津波の侵攻状況から防潮堤をかさ上げするようとの勧告を受入れ、その工事がほぼ完成間際であったので、非常電源がかろうじて助かり、福島第一原発の二の舞をせずに済んだ、との薄氷を踏む状況にあったことを知った。

3月11日午後2時46分、そこからは、東海村民3万8千人のそれぞれの生存をかけた歴史が始まった。家がくずれ、道がうねり、水と電気が止まり、避難所には人が溢れた。でも、その中で、東京電力第二火力発電所の煙突工事作業中であった方々のご不幸以外には、一人としてお亡くなりになった方がおられなかったのは、東北での惨憺たる被災状況に比して、救われることではあった。

この皆が受けた経験は、当然のことながら東海村に新しい流れをいくつか生み出している。

JCO事故後、原子力発電の安全確保にいくつかの提言をし、災害時の備えを国に整えさせた村長は、わが国の地盤状況及び村民のみならず100万人の命を想い、「脱原発」を宣言された。

少数ではあったが、反原発を唱えてきた村民は、今こそかねての主張を実現する時と活動を活発化させた。

原子力のことを、意識的に知ることを拒んできた大多数の村民は、東海村が、ドブプリ原子力に漬かっていることを知らしめられ、どう考えるか自分の頭で考え、行動しなければならない時期が来たことを知らされた。

原子力の未知数の可能性を知り、その未来を信じている村民すらも、人類と原子力との付き合い方の限度を極限まで厳しく追究しなければ将来は考えられないと感じ始めた。



その中でも、一生を原子力開発に捧げてきた村民の中で、「明るい原子力」とのバラ色の夢もまだ残ってはいる。

これら、原子力に関しては区々の村民ではあるが、災害は原子力災害ばかりではない、天災、人災多々ある。それに対する備えについても、せめて、世間並みには準備する必要がある、との共通認識を持ったことが、今回の大震災から受けた最も大事な課題である。

このような中で、平成24年1月に村議会議員選挙があり、平成25年9月には村長選挙が行われ、東海村の将来が決まっていく。

平成23年11月18日



新川流域

提供：田所 洋一

# 記録に残ることのない人々の話

東海村 総務部税務課 田畑 和之

ひどい揺れだった。誰もが初めての経験で、いろいろな人がいた。

震災5日目。

ペットボトルを少しだけ自衛隊に持って行った。そんな必要はないという者もいたが説き伏せた。  
「いいんですか！ありがとうございます！」

若い隊員は、遠慮もせずに受け取った。

その笑顔を見ながら、ああ、この人たちは給水の仕事をしているのに自分たちは飲んでいないのだ、ということに気がついた。

震災4日目

家から通勤できるようになった。村の様子がわかる。

崩れた塀の中に滑稽なほどしっかり立っている門。そこに貼ってある白い紙にはこう書いてあった。

「井戸水あります。ご利用ください。」

震災3日目

情報は何も入ってこない。電気も水もまだ来ない。

来たのは別の地区の住民が自分の地区のコミセンの給水車に並んでいるという苦情だった。

苦情は3時間も続いたろうか。

震災2日目

物資庫の前に一台の軽トラが止まった。

「米持ってきたから。」

おっちゃんはそう言って何袋かのコメを置いてこう言った。

「金はねえけど米ならまだあんだ。言ってくれば、また搦いて持って来っから。」

そう言って軽トラは走り去った。

初めて軽トラのおっちゃんをカッコいいと思った。

震災当夜

11日深夜。

この時はまだ東北で、こんなにもたくさんの方が亡くなったなんて知らなかった。

続く余震の中で僕は星がきれいだと思った。だめな公務員だ。

横を後輩が通った。

「星がきれいですね。」

自分以外にもダメな公務員がいた。不謹慎な奴だ。

「よく見とけ、これだけが俺たちへのご褒美だ。」

なんて言ったのは、今思えばかなりクサかったかと反省している。

## 被災

その時、僕は病院の待合室にいた。

平日の待合室は年寄りばかり。

ばあ様たちは「大きいねえ」とか言いながら、僕に棚の上のテレビが倒れそうだからと言って降ろさせるほどの落ち着きようだった。

揺れが収まって崩れた塀を見たときに、じい様たちが力強くこう言っていた。

「ま、何とかなっぺよ。」

「何とかすっぺ。」

うん、何とかすっぺね。僕もそう思った。



役場

提供：坏 正樹



役場 提供：二川原 治

# 3月11日の大震災を経験して

東海村立東海中学校 2年 武子 雛代

日本を不安と悲しみに包んだあの震災から、もう9か月が経った。私は、今もなお、あの大きな揺れが起きた時のいろいろな感情が混ざり合った気持ちや、震災直後の生活を思い出すことがある。

今回の大震災でつらい思い出しかないという人も多いと思うが、私はこの体験をしたことで、震災以前の日々の日常生活では気づくことのできない大切なことを見つけることができた。

まず一つ目は、人と人が協力することの大切さである。被災直後の数日間は、電気や水道など普段の生活の中でとても重要なものが使えなくなった。私の家では、家族総出で水を手に入れるために近くのコミュニティーセンターへ向かった。そこでは、地域の人々が村民のことを考え、懸命に働いている姿があった。困ったときは、自分のためだけでなく、他の人々のことも考えて行動できることが大切だと思った。又、人と人が協力することによって、一人では不可能なことも可能にすることができるということも改めて実感できた。

二つ目は、家族や仲間の絆である。被災後数日間は、これからどうなるのかわからないという不安がとてもあった。しかし、家族との暖かい会話や仲間の何事にも前向きな笑顔で、私の不安な気持ちは大分和らいだ。この出来事から、自分が改めてこんなにもよい家族や仲間にもまれて生活できていることをうれしく思い、絆の暖かさを実感することもできた。

三つ目は、様々なことへの感謝の気持ちが強くなったことだ。私たちが通う東海中学校は、地震により校舎が壊れてしまったため、私たち2年生は、1学期中、村の中央公民館を借りての学校生活であった。給食も普段の給食ではなく、弁当給食になった。いきなり今までの環境がガラリと変わり、少し不便と感じるときもあったが、東北地方には、全く授業を受けられない地域もある中で、勉強できる場所があるということに感謝した。又、普通に学校に行き、おいしい給食を食べ、勉強するという、私たちが当たり前だと思っていたことが、本当はとても幸せなことであり、感謝しなければいけないことであると深く感じた。

私は、この震災復興を進める方法の一つとして、人が互いに支え合う連鎖がとても重要なことなのではないかと思うようになった。さらに、人に助けられたら、自分も何かしら他人のためになることをすべきだと思った。

これから生きていく中で、この震災で得ることのできた貴重な体験をふまえ、「協力・絆・感謝」という3つのキーワードを忘れずに大人になり、この経験を後世に伝えていきたいです。



舟石川コミセン

提供：泉 幸男

## 3月11日 東日本大震災を忘れない

東海村立村松保育所 所長 塚原 千枝子

3月11日は4歳児が中心になり、3時からお別れパーティーが開かれる予定でした。何日も前から、飾り付けやプレゼントを手作りしていた年中児。それを楽しみに待っていた年長児でした。

3月11日の午後2時を過ぎた頃から4歳児は午睡を終えて片付け、パーティーの準備を始めました。3歳児もパーティーに参加するためいつもより早く午睡を済ませ、パジャマから洋服に着替えて準備をしていました。主任保育士、フリー保育士は給食室で、調理手たちとパーティー用のおやつのパフェづくりをしていました。私がテーブルに飾るお花を小さなガラスの花瓶に生け始めた時でした。扉のガラスがカタカタと鳴り出し、小さな揺れを感じました。「地震！」と感じた時にはガラスの音も揺れも大きくなり、私は慌ててすぐに給湯室を出てテラスに立ち様子をみました。いつものようにすぐに揺れが収まるのではないかと最初は思いましたが、すぐに異常な揺れを受け、危険を感じて「庭に出なさい」と大声で保育士や子どもたちに指示していました。

2歳児はまだ寝ている時間帯でした。職員が必死で何度も往復しながら寝ている子を抱き上げて庭に出しました。部屋から連れ出した0歳児は乳母車に乗せましたが、揺れが激しくなり2台の乳母車は勝手に動き出してしまうほどでした。私は必死に押さえましたが、そのうち立っていることができなほどの大きな揺れに襲われました。0歳児の担任保育士も子どもを抱いたままテラスで動けない状態でした。

子どもたちも職員も庭の真ん中に集まって大きな揺れに悲鳴を上げながらも耐えていました。大きな揺れの中で「大変な事が起きてしまった。震源地はもっと大変なことになっているだろう。これからどうなる？」といろいろな思いが私の頭をよぎりました。

立ってられないほどの大きな揺れが静まって、子どもたちの様子を見ると不安でいっぱいだったと思いますが、泣きじゃくる子は数名で、ほとんどの子が職員の励ましでパニックにもならず我慢している姿が目頭が熱くなりました。子どもたちの周りを「いい子だね！大丈夫だよ！」と褒めて歩きましたが、この言葉を発しながら、自分を奮い立たせていたように思います。

この日は風が冷たく吹いていました。0、1、2歳児はパジャマ姿で逃げたので、揺れが弱まっている間に子どもたちの衣類を部屋から持ち出し、パジャマから洋服に着替えさせ、庭にゴザを敷き午睡用布団を出せるだけ出し、子どもたちを包み込みました。

役場と連絡を取ろうと職員室に戻って電話の受話器を取りましたが反応はありませんでした。保護者との連絡も取れません。職員室の西側の壁は剥がれ落ち、パソコンもプリンターも被害を受けているようでした。地震が弱まってすぐ、職員がタライやバケツに水を汲み出し始めました。すぐに断水となり、冷静な判断のおかげでその後トイレの水として使うことができるとも助かりました。

私たちは庭の中央で避難を続けていましたが、余震も多く、庭の松の木や地割れも心配となり村松コミセンへ避難することにしました。宿幼稚園からも職員が駆けつけてくれ子どもたちの避難を手伝ってくれました。

子どもたちをコミセン玄関前の軒下に落ち着かせ、職員で手分けして、保育所からトイレト  
ペーパーや食料、飲み物、石油ストーブなど必要な物をコミセンに運びました。寒さを避けようと  
軒下にいたのですが、村松コミセンでも頻繁に起きる余震に、建物の耐震が心配とのことで駐車場  
に移動しました。

まもなく住民の方々が少しずつコミセンに避難してきましたが、駐車場ではお年寄りが腰を下ろ  
す場所也没有。急いで駐車場の状況をコミセンに伝え、椅子、ゴザ、座布団など運び出し急  
ごしらの休憩所をつくりました。その後1時間後くらいだったでしょうかテントが張られ、毛布  
が運び込まれました。体を温めようとドラム缶での焚き火が始まりましたが、多くの方が寒さに震  
えていました。

日が傾き風はますます冷たくなり、子どもたちは職員の車に分乗してお迎えを待ちました。保護  
者の方は、道路があちこちで寸断されお迎えは大変だったと思います。思ったより早くお迎えに来  
られたおかあさん、おとうさんもいましたが、ほとんどの方が真っ暗な道を歩いてのお迎えでした。  
日立から歩いてやっとコミセンに着き、休む間もなく暗い道を自宅に向かって歩き出すおかあさん  
と幼子に「がんばってね。気をつけてね」と声をかけることしか出来ませんでした。自宅には怖く  
て帰れないとコミセンで一夜を明かす親子もいました。無事、お迎えが終了するまでには、その日  
の夜9時を大きく過ぎていました。

住民がコミセンの建物の中に入ったのは、午後8時30分を過ぎていたと思います。保育所の職員  
は水や食料、毛布の配布を手伝いました。毛布はひとり1枚を目安に配布しましたが、避難者が多  
く、何度かに分けての配布となりました。村松コミセンの多目的室は大型ファンヒーターがまわ  
り、その赤い光で少しは暖が取れてよかったと思いましたが、床からの冷えが厳しく、毛布が入っ  
ていた袋を敷いてもらったり、自宅から布団を運んで来た方もいました。お年寄りと小さな子ども  
連れの方は比較的暖かい和室で過ごしてもらいましたが、大勢だったので体を横にできなかったと  
思います。コミセンの入口近くのスペースで寒さを我慢しながら朝を待つ方もいました。

配給の非常食は水で戻さなければならず、体が冷えている状況では冷たくてほとんど口に入れら  
れなかったのではないかと思います。私自身も食べる気になれませんでした。こういう時はおせ  
んべい、ビスケットなどの方がよかったと思いました。幸い翌日は炊き出しも始まり、温かいお茶、  
おにぎりの提供ができました。保育所の職員もおにぎりづくりや水運びを手伝いながら、保育所の  
後片付けを始めました。

コミセンのトイレは大変な状況でした。流す水は思ったより早く運び込まれましたが、トイレ  
トペーパーの使用後の始末を考えていなかったのですぐに詰まってしまいました。詰まりを手袋で  
取り除き、ペーパーを流さないように徹底させ、なんとか続けて使うことができました。足の不自  
由なお年寄りの方は、トイレに立つのも大変で支えが必要でした。屋外に仮設トイレはできた  
ますが、ブルーシートの囲いは不安定であり、また、洋式にしなければせっかく造っても足の不自  
由なお年寄りには使いづらく敬遠されてしまうと思いました。

コミセンに避難したとき一番心配だったことは津波でした。保育所から持ち出した携帯用ラジオ  
は岩手、宮城、福島での津波が大きいことを伝えていましたが、今の自分たちがどんな状況に置か  
れているのかさっぱりわかりませんでした。津波は大丈夫なのか？小さい子どもたちを避難させる

のに歩いて逃げなくてはならない。逃げるなら早く行動しなければならない。どう判断していいのか迷っているうちに新川の水が逆流して周りの木々を押し倒しているような音が耳に入りました。幸い私たちのところに水が溢れ出すことはありませんでしたが、後から知った岩手、宮城、福島と同じような高さの津波が押し寄せていたら、私たちはどうなっていたのかと思うとゾッとします。子どもたちのおうちの方々に何とお詫びすればいいのかと、今思い返してもゾッとします。

村松保育所の建物は地震で大きなダメージを受け、保育は総合福祉センターの児童センターを間借りしてスタートしました。震災を経験し、頻繁に起きる余震に怯え、保育環境も大きく変わり、夜泣きやメソメソと泣くことが多くなった、怖がってひとりでトイレに行けない等の不安を見せる子どももいました。そして東京電力福島原発事故により外遊びができない日が続いたことは、子どもたちのストレスをより大きくしたと思います。

年長児は修了式を控えていましたが村松保育所は使えず、他の施設も震災の影響で借りられず、修了式会場をどうするかが問題となりました。使用できる会場は百塚保育所しかないと公立3か所の合同修了式を実施しようということになりましたが、保護者の方々の思いもあってそれぞれの保育所ごとに実施となり、村松保育所は村松コミセンをお借りすることになりました。修了式の前日が照沼小学校の卒業式で、その卒業式に飾った桜の木の活花を私たちも使わせてもらい、会場が一層美しく温かく包まれました。

毎年修了式で発表してきた竹馬や跳び箱、竹踊りは取り組めず、保護者の方々も非常に残念だったと思いますが、今まで保育で積み上げてきたものが子どもたちの元気のいい歌声となって、これからの不透明な生活に明るい一筋の光を与えてくれたように思いました。



村松コミセン

提供：田所 洋一

# 東日本大震災を経験して

寺西 一夫

東海村では、平成23年3月11日（金）の午後2時46分に未曾有の大地震（震度6弱）に遭遇した。緑ヶ丘団地の我が家では、揺れる舟に乗っているような感じであり、食器棚や本棚から食器類や書物などが落ちて床上に散乱した。この地震（マグニチュード9）および津波は主として東北3県（岩手、宮城および福島県）および茨城県に甚大な被害を及ぼし、東日本大震災と命名された。

我が家では直ちに停電および断水になり、停電は13日まで、断水は19日まで続いた。第2次世界大戦当時の昭和20年頃に停電や断水を体験した私にとっては、約65年ぶりに再び不自由な生活を味わう破目に陥った。贅沢な現代生活に慣れた私にとって、物の有難さを再認識するよい機会であったと思っている。

電気および水なしでは、米飯を食することができず、水なしでは食事のみならず、水洗トイレの後始末に非常に難儀した。

私は、3月12日から19日まで、中丸コミュニティセンターに避難したので、その体験を記す。飲料水は、毎日給水車からペットボトルなどで受け取って一応の必要分は賄うことができた。また、食事は、村からの救援物資（握り飯やパンなど）を充当した。この間は、野菜、肉、魚類などはほとんど入手できず、栄養状態は最悪という生活を送った。

3月20日に東海駅まで自転車で出掛けたが、途中で見た道路や家屋などには、かなり大きな被害を受けた箇所があった。駅は一部損壊で利用不可能のために閉鎖、常磐線は数箇所の線路損壊による不通とのことであった。このような事態には、七十数年間遭遇したことがなく、これらの事からも今回の震災の甚大さを痛感した。

この作文を終えるに当たり、自作の川柳を記す。

震災で 水、電気の価値 よくわかり



動燃通り

提供：坪 正樹



# 避難所になって

東海村立石神小学校 教諭 飛田 順一

3月11日、本校では、5校時目に通学班の仮編成会議を開いていました。この日の会議で6年生が班長を退き、新しい班が決まります。会議が終わった班から校庭に並び、5年生の新班長が先頭になっての下校です。大方の班が校舎を出て下校を始めたその時でした。大地が縦に大きく揺れ始めました。今までに体験したことのないほど大きく、そして長い縦揺れは、その後にやってくる横揺れが相当大きいであろうことを予感させました。しかし、実際の揺れはその想像をはるかに上回るものでありました。われわれ教師は児童をしゃがませ安全を確保したうえで地震が収まるのを待ちました。

下校途中であったため、建物の中での揺れを体験した者がほとんどいなかったことは不幸中の幸いでした。また、けがを負った者もいなかったことは何よりでした。児童を校庭の中央に集め、保護者の迎えを待つことにしましたが、電気も電話も不通の中、連絡手段がなく、最後の児童を引き渡すことができたのは夜の9時をまわっていました。

校長、教頭と教務主任が学校に残り、事後の対応をすることになりました。暗くなると地域の方々が本校の体育館に続々と集まってきました。最終的には100人近い方々が集まってきました。何をどう対応したらいいか戸惑っているところに、村役場の防災対策課の方々が来てくださり、指示を出してくださり大変心強く感じました。

小さなお子さんも多くいましたが、みな静かに過ごしており、周りを気遣う姿が見られました。このことは、改めて地域の方々のモラルの高さを知ることとなりました。後に震災を経験してなおうろたえず、耐える日本人の姿に世界中が驚嘆し、賞賛したという話がマスコミ等で報道されましたが、まさにその姿がそこにはありました。

幸い本校の体育館には村の非常用の備蓄庫が備わっていたので、毛布と水と非常食をいち早く避難した人たちに配布することができました。村の備蓄品を配っているだけなのに、避難した方々から大変感謝され恐縮したことを覚えています。また、電話も電気もつながらない職員室で、唯一の連絡手段である防災無線から流れてくる野沢指導室長（当時）の声には本当に励まされました。

今回の大震災は改めて危機管理の重要性をわれわれに教えてくれました。子どもたちの安全を確保するためにも、真摯な気持ちで取り組んでいかなければならないことを痛感いたしました。また同時に改めて、日本人の強さ、素晴らしさを知る機会となったことも事実です。今回の大震災での経験を生かして、これからの教育活動に邁進していきたいと思えます。

# 震災を通じて思ったこと

仲田 久夫

平成23年3月11日午後2時46分、東日本大震災に遭遇する前の9月に、60歳定年という形ではあったがリストラにあい、失業した私は、ハローワークから帰り、住居駐車場で車を降りた直後に、体を揺さぶるような、生まれて初めての感覚に襲われた！

最初は、いつもの地震かなと高をくくっていたものが、なんともいえない、恐怖ではなく実感の無い、訳のわからないものへと変わっていった。そう、60を超えるこの歳までこれほどの地震には幸いにあった事がなかった。仕事で日本の各地を短期、長期の勤務をしたが、今思えば、初めての就職で、静岡で3年近くを過ごしたときも、大震災にあっても不思議ではなかった。兵庫県で半年過ごした時も、阪神淡路大震災と重なっていてもおかしくなかったと思うと、想定外の、いや想定できることだったのかもしれない。

よく、自分だけは交通事故を起こさない、事故に遭わないと思いついていて、本当は何時いかなるときにも、交通事故に遭うかわからないと考えるのが、現代社会ではもはや常識ではないだろうか。

自然災害はなおさらに確率的には低いのであろうが、被害に遭うこと、被災者になることを想定外と言ってはいただけないと、肝に銘じさせられた東日本大震災である！

話をもどして、車の横に立っていて、かろうじて車のボディに手を置くと、車がバウンドしながら、自分に擦り寄るように感じた。駐車場入り口付近の、ブロック塀が崩れ、屋根瓦が近所の至る所で、ガラガラ、バラバラと降っている光景を、啞然として視ていた、いや単に目に入れていただけだった。

われに返って一番先に頭をよぎったのは、火災のこと。自分の住んでいるアパートの方々が室内から飛び出してきて、様子を見ているので、「火は大丈夫？」と声をかけ、ガスの元栓を8戸分、全部締めて廻って、其れから確か先ほどの同アパートの住人に状況がはっきりするまでは火を使わないように声を掛けた。

次に外から、自分の室内を覗き、家具や食器が倒れ、散乱しているのを見たが、まだ状況がはっきりしない為、外で様子を伺いながら考えていたところ、駐車場入り口のブロック塀が道の半分を塞いでいることに気がついた。

その家は、老婦人の一人暮らしで、外に出てきてただただびっくりしているだけである。自分の車を出すにも、他の住人が帰って来た時でも、出入りが不能な状況であり、それが徐々には表通りへ、幹線道路への渋滞へと波及していくことも予想できた。取り敢えず車が通れるスペースを確保しなければと思いたち、理屈抜きで体が動き、瓦礫の整理、移動の行動に出ていた。やはり廻りを見渡すとあちらこちらで、この時間だから当たり前の状況では在るのだが年寄りばかりがそれでも声を掛け合い、やはり公共の道路の確保にみんなが努めている。

でもこの行動は、本当は理屈抜きで何かしようとする、純粋な、『人』としての心の発露なのではないだろうか？

そんなことを、これを書きながら思い、人間性の、いや、日本の習慣に根付いたすばらしい心というものを感じたと言うのは大袈裟なのだろうか？

それから、どうやら小一時間もたっていたと思うが、妻の所在確認と息子家族の安否確認を、携帯で行ったが、なかなか通話不能で、広域に被害が出たであろうことを感じた。しかし今はと思い、更に、ビル管理という職業を最近まで経験していた影響であろう、廻りを巡回する安全確認の行動に出ていた。幸いプロパンガスの集積スペースも何も異状が見られず、留守にしている他の家も見える範囲で煙など出ている様子も無く、一安心していると、隣の若者が「大丈夫ですか、異状は無いですか」と声を掛けてきた。なんとも頼もしい若者がいるなど思いながら、「大ごとにならなかったね」、「いやーまだ余震があるかもね?」とお互いを鼓舞し、戦場の同士の気分かな?ちょっと違う世界、それとも役者、とにかく日常とは違う気分であったことは、いい意味で非日常の経験であることは、いま思えば確かなことであった。

このような若者が次の町内を、村を、日本を、世界を、真剣に考えていく素晴らしい機会なのではと思っている今日この頃である。

何ととっても、人間が、住民の集まりがこの世の中をこれからも作っていかねばならない。今の年寄りが本当に残していくべき事は、思いやりや、他人との繋がり、「絆」と呼ばれるものを教える事ではないだろうか!?

仏だけ創って魂を入れていない、最近の事情をみんなで考える機会と捉えるべきではないだろうか。



豊岡地区

提供：坏 正樹

# 東日本大震災(津波)で被災し住民が自主避難 ー久慈川流域の豊岡集落ー

豊岡区自治会 橋本 敬

## ○状況

3月11日、岩手から茨城県の太平洋沖で発生したマグニチュード9.0の大地震は、未曾有の規模で津波を発生させ、東日本一帯を襲い、死者・行方不明者20,000人を超えた。

更に、大津波は東電福島第一原子力発電所を飲み込み、発電所4基が制御不能となって爆発を引き起こし、放射能を広範囲に拡散させてしまった。半径30km以内の土地・建物・家畜・農産物等が汚染され、住民は「着の身着のまま」で遠くへ避難する大惨事となった。

豊岡集落も、地震によって道路や住居・塀等が損壊し、また、電気・水道等のライフラインが被害を受け、通信・情報が途絶え、住民にとって不安な生活状態が続いた。

地震後、久慈川を遡上した津波は、堤防の水門2基から集落側へ流れ込み、田畑や用排水施設等を破壊し民家の庭先まで迫った。危険を感じた住民は対策本部からの避難指示を待てず「てんでんこ」に白方コミュニティセンター等へ自主避難する事態となった。(避難指示は出なかった)

区自治会としては、組織だった対応ができなかったものの、住民個々が自分の判断で対処し、人的な被害が生じなかったことが不幸中の幸いであった。

## ○これまでの住民の心構え

豊岡集落は海拔5mくらいで、久慈川が太平洋へ注ぐ河口流域に位置し、洪水や津波が心配される地域であるが、永年にわたる「水害との付き合い方」は日常の生活文化として、心構え・意識が引継がれ持ち合わせてきている。

昨今は、東海村地域防災計画が策定され地震・水害・津波等に対する事前措置が施され(東海村津波ハザードマップでも堤防が損傷無ければ、1677年の延宝地震約M7でも浸水は無いとシミュレーションされている)、それぞれが適切に運用管理されるよう改善され、住民は安心して生活してきた。

しかし当日、久慈川堤防の水門は閉まらず、堤防としての役目が機能せず津波が流入し、住民を不安に陥れる事態となった。→村へ東海村地域防災計画に基づいた行政側の対応について説明を要望中。

## ○被災を受け、明日に向かって

3月11日の被災確認と今後の対応について、早速3月末の区自治会通常総会において議題として議論され、2つの課題について対策を講じることとなった。

### 1) なぜ、水門が閉まらなかったのか? →村へ説明を要望中

水門は、堤防の一部として人的に操作管理される施設であり、特に津波などの非常事態では避難勧告措置と一体で機能が活かせるような対策を講じる事を。

### 2) 自主防災組織を作ろう →特別委員会を設置し住民が納得する方法で

当自治会としては、前年度からこれら自然災害時に援護を必要とする人や、子ども・高齢者を助け合う仕組みを作ろうと総会などで話題としてきた。

しかし、この度の課題となった水門は、「当然行政によって閉まる」こととし、「閉まらないこともある」事態は想定していなかった。

この度の被災体験で「災害時の助け合いの仕組み」をつくる住民の話し合いを始める機運が高まってきた。



久慈川堤防水門

提供：坏 正樹



豊岡地区水門付近

提供：坏 正樹

# 東日本大震災を教訓として

東海村日本赤十字奉仕団 委員長 飛田 静子

世界最大級、未曾有の大地震による、停電、断水、電話不通、ガソリン不足、道路寸断、亀裂等々と、続く余震におびえてしまい、赤十字奉仕団として何をすべきか、どう立ち向かっていったらいいのかわからず、手も足も出ず、言葉も失うほどでした。

現在まで、県や村で行った防災訓練には参加し、決められた炊き出し等は行っておりましたが、今回の大震災には、通用しませんでした。しかし、赤十字奉仕団として行動、活動しなければいけないという使命感に燃えて、役場から「何をしてほしいか」の連絡が来るのを待つより、直接村の対策本部へ行き、本部長より実情を聞き、又絆の災害ボランティアセンターに行き、どんな依頼が来ているかの情報を把握し、福祉課、社会福祉協議会と連絡を取り合いながら、私達奉仕団の出来る活動を選択し、取り組みました。

主なものは、避難所での炊き出し、給水の手伝い、病院での食事作り、育児サポート、傾聴等々でした。通信の手段も、ガソリンもなく、村内各地区に分散している役員に、連絡を取るのには困難をきわめました。自転車や、口伝えで何とか連絡を取り合いながら、皆必死でその責務を果たすべく、活動に取り組みました。

各々、全員が被災しているにもかかわらず、家族からの後押しや責任感の強さから、団員が一丸となって行った活動には、頭の下がる思いがいたしました。

災害活動の今後の課題として

- 一、村や自治会と、日頃より連携を密にして、災害時の活動に、遅滞なく従事出来るようにする。
- 二、組織全体としての活動は勿論であるが、インフラが寸断された場合を想定して、地域に分担して（各コミュニティセンターを中心として）の速やかな活動が出来るように、責任者としてセンター長、又は、各区の自治会長を定め、どの団体が何をするか、役割分担を明確化した組織図「防災計画書」を作成し、その中で活動に取り組むのが、ベストである。
- 三、緊急時には、マニュアル通りにはいかない事もあり、その為に必要な知識、技術を身につける等、日頃の訓練を大切にしたい。地域の地域の為の防災計画により、自分達で出来る役割の中に、東海村赤十字奉仕団も加えていただき、その責任を果たしていきたいと思えます。



日本赤十字奉仕団活動風景 提供：本人

# 震災の日ー学校，そして大切な地域の仲間

東海村立中丸小学校 保護者 平出 由佳里

ゆっくり動き出した地面と同時に、飼い犬が唸り始めた。長く厳しい揺れが続くと、最後は立ってられないほどの状況。子どもを心配するご近所の人々の叫び声が聞こえ、私も我に返り中丸小へと向かった。子ども達も先生も無事でいるだろうか。

すぐに娘のいる5年生の教室へと駆け上がったが、再び大きく揺れ始めた。教務の先生とお会いし「揺れています。」と叫ぶと、「お母さん、この揺れが収まったら児童を外に出しますから。」と、普段と変わらぬ声。安全を確認し、「5年生、ゆっくり慌てず校庭へ出ましょう。」と拡声器で伝え、担任と子ども達が教室から出てきた。私も動揺すまいと微笑みながら見守った。その後、6年生も同じ様に校舎の外へと出た。先生の見事な誘導だった。

校庭には、集団下校前の1，2年生、少し帰りかけた3年生は先生が呼び戻し、先に校舎から出していた4年生が列を作り座っていた。娘の所へ行くと、私を見て安心した子、家族を思い出して泣き出す子、反対に一生懸命我慢している子、いつもよりテンションの高い子もいる。校長先生も出張先から、転びそうになりながら走っていた。だがそこへまた3回目の大きな地震。話し合いをしている先生方も子どもを見守る。校舎がぎしぎしと音をたて、旗のポールも折れそうだ。広く薄暗くいつもと違う校庭。恐怖と寒さでまるで私達だけがこの世に取り残された様な感覚だった。すでに駆けつけた保護者と共に児童を励まし、ここにいれば安心と信じて他の家族を待っていた。

次第に、迎えの家族が増え余震も少なくなったので、先生方が確認をしながら家族に子どもを引き渡していく。家族に会えて安心した子ども達の顔を見てほっとした。近所の子も連れて帰りたいたが、行き違いになる事を恐れて仕方なく自分の子どもだけを連れて帰る人もいる。仕事をしている方、遠くにいた方、幼い子を抱えている方。迎えに行くことができず、連絡も全く途絶えてどんなに心配だった事だろう。遠い家へは、陥没した道路に注意して先生が付き添って下校。その途中で、迎えに来た大人たちと会えて、家族が来られない家の子どももそのまま近所の方が連れて帰った。また祖父母の方の姿も多く見られた。学校から早目に自宅に戻った人は、まだ行っていない方に迎えに行くようにと走り回り伝えたそうだ。そして、8時に最後の児童のお迎えが終わったと聞いている。

私達は全員無事だった。だが、あの時大津波が迫ってきていた東北の事を知った今は、耐え難い気持ちになってしまう。本当に胸がつまる。そしてもしあの時私達の所へも大津波が向かってきていたら…。原発がただならぬ状況に陥っていたら…。

一体何故、こんな悲しい事が起きてしまったのだろうか。情報がないまま、どんな判断と行動を取ればいいのか。どうか子ども達よ、人間が太刀打ちできなかった大惨事の日を忘れずに、身も心も強くなり、人との繋がりを大切に生きてほしい。

# 「あの日」のこと

茨城県立東海高等学校 3年 堀田 綾那

あの日、私はHR教室で社会人講話を受講していた。お招きした茨城県子ども会育成連合会（東海村役場勤務）の澤畑先生の課題「何もないところから自分たちの発想を生かして創り出す」をテーマに、新聞紙だけを使った遊びを皆で考え、夢中になって取り組んでいた。終了後も友人と楽しく振り返りながら、次の講師の先生を呼びに行くため、廊下に出た。小さな振動が3階の廊下を通り抜け、私たちの身体に伝う。友人は「また、地震」と呟き、私も気にも止めずに歩き続けた。そのころ、小さな地震が頻発していたからだ。

私と友人とが教室に戻ったその瞬間、低い呻き声のような地響きが伝わり、大きな、経験したことがないほど大きな揺れが校舎を襲った。身を屈めた私はとっさに柱に掴まって揺れが過ぎるのを待とうとした。しかし、激しい揺れは収まるどころかますます強く、激しく校舎全体を揺すぶった。私はこの状態が理解できず、まるでパニック映画の主人公にでもなった気がしていた。

電気も消えた教室でやっと揺れが収まった時、1人で自宅にいる母のことが一番先に思われて、あわてて電話をしたが一切繋がらない。クラスメートの1人は突然、過呼吸を起こしてしまい、私は慌てて紙袋を探し彼女の口に当てて、必死に励ます言葉を掛けた。先生から退避の指示が出て中庭へと避難しても、断続的に強い揺れが続き不安はますます大きくなった。窓ガラスがすべて割れ散った体育館を見ては、事の重大さを痛感した。

その後、メールでならばなんとか家族と連絡を取ることができ、家族の無事をお互いに確認できた。私の自宅は学校から自転車で5分ほどの村内なので、近くの友人と3人で帰宅を決意し、先生の許可を得て下校することにした。

帰宅途中の光景は今でも忘れることができない。大きなブロック塀が叩きつけられたように崩壊して道を塞ぎ、液状化現象で粘土のようにくねった道路や、切り落としたように崩落している路肩を目の当たりにして、自宅が無事であるのか、今後も今まで通りの生活が続けられるのか、不安でいっぱいだった。

帰宅すると玄関に飾っていた瀬戸物が割れて足の踏み場もなく、私の部屋は本が散らかって家具は斜めに傾き、どこから片付けてよいのか、まったく手のつけられない状態だった。その夜は何度も救急車のサイレンが鳴り響き、不安で眠ることもできなかった。

翌朝からは電気もガスも水道も止まってしまった。家にあるものを炭火で焼いて食べたり、長蛇の列に家族全員で並び食料を確保したりした。3日目からは電気が通じ、テレビも見られるようになり、携帯電話も充電して使えるようになった。

テレビのニュースで、私たちが体験したこの地震の事が徐々に解ってきた。東日本大震災は多くの人の命と生活を根こそぎ奪ったものだった。今、こうして家族の呼吸を感じ、友人や先生と楽しく高校生活を送ることができている。無事に生かされているこの事実は本当にありがたいこと、と今更のように感じる。村内の店も回復しつつあり、道路の整備も進んでいる。あの頃は先が見えなかった就職活動も、今は無事に成功し地元の内定を得ることができた。



しかし、地震直後は私は本当に孤独で不安だった。ライフラインが閉ざされ、今まで繋がっていた学校や社会と遮断され、情報がストップし、周囲の状況が全く解らない。家族の絆を大切にしよう、そしてそこから一步前へ出て、社会の絆も広げていきたいと切実に考えた。

これから社会人として生きていく私たちは、まさにあの日に学んだ「自分たちの発想を生かして創り出す」ことを常に意識し、人と人とのつながりを大切に、社会に貢献できる大人として成長していきたい。東日本大震災を振り返って、今、私は強くそう考えた。



阿漕ヶ浦クラブ

提供：坏 正樹



東海村総合福祉センター「絆」周辺

提供：澤井 正雄

# 東日本大震災を通じて

茨城県立東海高等学校 2年 宮本 怜奈

平成23年3月11日、マグニチュード9.0の大震災が発生した。8ヶ月たった今、あらためて「あの日」の自分を振り返ってみる。

私は東海高校の4階教室で「社会人・卒業生講話」を受けていた。地震の第一波は「いつもの震度3か」という思いでいたが、揺れは収まるどころではなく、自分の机の下に必死で潜った。揺れ続ける恐怖に同じく机の下で友人が涙を流し始めていた。先生の誘導で校舎外に避難し、整列を完了しても強い地震が何度も発生した。地面が揺れ、校舎が揺れ、体育館の窓は割れ飛んでいた。

そんななか、原子力発電施設の近くに自宅があるため、自宅にいる父や姉、祖父母のことが心配で心配で、不安でたまらない気持ちだった。職場が近かった母は、すぐに東海高校に到着し、お互いの無事を確認し合い、自宅にいた姉を呼び寄せた。

空に夕焼けが広がり、風も強く冷たく、不安だけが募っていった。保護者と連絡が取れず、高校に一晩泊まることになった生徒も多く、地域の方たちも高校へと避難してきて、避難所となった格技場に皆で待機した。この春に東海高校を卒業したばかりの姉がやっと到着した頃は、空も暗くなり、しかし電気は一切ついておらず真っ暗で、陥没しているという道路は危険なため、母と姉もそののまま高校で一夜を過ごすこととなった。長い夜はまるでアラームのように1時間おきに強い地震が襲い、そのたびに目が覚め、一緒に一晩過ごした友人たちと「不安で不安で、眠れなかった」と話し合った。

翌12日の昼までには生徒もそれぞれ親が迎えに来て、地域住民の方たちも帰宅し、私たち家族も自家用車で帰宅した。高校付近は比較的、道路の損壊が少なかったが、自宅に近づくにつれ、崩れ落ちた路肩や大きな穴が開いている場所が目立ち、通行禁止区域も多くなった。車窓から眺めながら「本当に大変なことになった」とただ、不安を感じていた。

自宅は電気・水道が完全に止まり、津波の影響で川が氾濫したことからボイラーは水浸しで、全く使える状態ではなかった。ライフラインはガスだけが使用可能で、生活が安定するまで白米と漬け物だけの食事にしようと家族で決めた。部屋は様々な物が倒れてしまい、一切入れない状態であった。

二日後に電気が復旧したときは、改めて電気に依存していたことに気がつき、無駄遣いをしてその意識がなかったことを大いに反省した。そのほかにも食べ物や水など、本当に意識せずに贅沢していた普段の生活を家族で見直し、話し合う機会となった。テレビや新聞で知った深刻な被害を受けている方々に、申し訳ないと痛感した。震災後、電気の消し忘れやエアコンの設定温度などをこまめにチェックし、節約を心がける生活が普通に身についた。

今、あの日を振り返ってみると、震災直後の私はただ、家族の安否を一番に心配していた。その気持ちは被害の大小に関わらずだれもが同じ気持ちだったろう。家族や大切な人々が亡くなってしまふのは、自分の生きる気力を失うほどの辛いことなのではないかと思う。家畜やペットを家族同然に思っている方々には、離れて暮らすことは本当に悲しく辛いことだろう。

「命の大切さ」を痛感した経験だった。東日本大震災ではこの大切な命が1万6千も失われたのだ。この先10年後も20年後も、ずっとずっと忘れてはならないと感じる。

3・11東日本大震災によって「日常」が「非日常」になりうることを考えさせられた。私の住む東海村もまだ完全には復旧してはいない。確かにそこに生活があったはずの家屋が倒壊したままだったり、陥没した道路や、被災した幼稚園から中学校も、復興に向けて立ち上がったところだ。私にできること、私がすべきことをしっかり考えて、これから生きていきたい。



舟石川コミセン

提供：泉 幸男



豊岡地区久慈川水門付近

提供：坪 正樹

# 「東日本大震災時の避難状況等について」

東海村立東海南中学校 教諭 安 敦之

平成23年3月11日、金曜日。東海南中学校では、午後、学年末の授業参観と学級・学年懇談会の日であった。3年生は、すでに卒業式を済ませていたので1・2年生のみの活動であった。当日は何事もなく、予定どおりその行事は進むはずであった。

5時間目の授業参観は、午後1時30分に始まった。1年生は総合的な学習の時間、学年全体で格技場に集まり「進路を考える会」を行っていた。2年生は5・6校時、同じく2時間つなりの総合的な学習の時間で「高校説明会」を体育館で行っていた。

午後2時46分頃、宮城県沖を震源とする大きな地震が起こった。校舎の底から鈍く重苦しい地鳴りを感じた。その瞬間校舎は縦に揺れ、横に揺れ、方向の定まらない恐ろしく激しい揺れに見舞われた。ちょうどその時、1年生は予定の学習を終え、生徒及び保護者とも格技場から各教室に廊下、階段を使い移動中、2年生は体育館でS高校の校長先生が生徒及び保護者に対し講話中であった。

揺れが収まるまでとにかくじっと待ち、それから学校の危機管理マニュアルに従って安全確認をし、生徒、保護者に向けて避難の放送をしようと考えていた。ところが、揺れは随分長く続き、収まるどころか次第にさらに大きくなった。廊下、教室、階段のガラスは今にも割れ出しそうにきしみ、生徒のロッカーからは荷物が勢いよく飛び出した。また、体育館のステージにつるしてあった蛍光灯は傘ごと落ち、天井の電灯が激しく揺れ、悲鳴が上がった。さらに職員室では、机が跳ね上がり、引き出しは全て飛び出し、中の荷物が散乱、そして一瞬のうちに明かりが消え停電し、緊急放送用の器具も使用不能になった。

その後わずかに揺れが収まってきた頃に、恐怖心を全力でカバーし、誰とはなしに「校庭に避難しろ！」の指示を出し、皆が手分けをし、避難誘導を始めた。校舎内の1年生の生徒、保護者はほとんど混乱もなく、無言で校庭に避難できた。また、すでに体育館では2年生の生徒、保護者は教師の迅速な誘導で校庭に避難していた。

午後3時頃、全員が校庭に集合。学校長の指示で、保護者、生徒とも人員点呼をし、安否の確認をした。そして、午後3時少し過ぎ、揺れが収まりかけてきたので、念のため講師とスタディーサポーター、教務で校舎内に生徒や保護者、教職員が残っていないかどうか4階から順に確認した。

午後3時15分頃、茨城県沖を震源とする2度目の大きな揺れが起こった。エレベーター棟が激しく揺れ、継ぎ目が壊れ、再び校舎内には大きなきしみ音が鳴り響いた。その頃に、教育委員会から緊急無線放送が入り、災害の重大性が確認できた。校庭では、その指示を待ちながら、生徒と保護者の安全確保をどうするか学校長を中心に検討した。

午後4時頃、大地震の情報、周りの状況が把握できずにいたところ、保護者から東北地方の被害状況や大津波警報のこと、学区内の道路の陥没の様子、道路の混雑など東海村での被害の甚大さを知らされた。夕暮れが迫り、まだまだ余震が続く中、気温も下がってきたので、学校長が決断。生徒は、教室に戻らず、荷物も自転車も学校においておくこと、月曜日の登校についてはメール配信

サービスで連絡することを伝え、保護者と生徒と一緒に帰宅させた。また、保護者がいなくても近所の生徒と一緒に帰宅させることを依頼した。また、適切な大人が見つからない生徒は、職員室隣の会議室に待機するようにした。

随分あたりが暗くなってきた午後5時頃、ほとんどの生徒が保護者らとともに帰宅していった。残った2人の生徒は会議室に待機していたが、午後7時には全員の保護者が引き取りに来た。その夜は、学校長をはじめ教頭、教務、男子職員数名が学校に残り、保護者対応に備えた。



校庭に避難した生徒・教職員

提供：本人



避難後の体育館

提供：本人

# 震災体験

茨城キリスト教学園中学校 3年 平岡 彩夏

とてつもなく長く大きな地鳴りが響き渡り、今まで体感した事のないような揺れが東日本を襲った3月11日、私は想像を絶する恐怖を体験しました。

何の前触れもなく突如現れた恐怖は今もなお、至る所に傷跡をのこしています。あの時の記憶はずっと忘れることはないでしょう。

停電、断水、食料不足などたくさんの困難を目の当りにし、今まで当たり前のようにすごしていた日常がどれだけ有り難いものなのか思い知らされました。

しかし、暗闇の中、家族と過ごした日々は笑顔が絶えることはありませんでした。

ろうそくを囲みながら、生まれた時の話や、幼少時代の話や、学校の話や、両親の若いころの話などたくさん話をしました。

幼稚園のころの珍事件や、小学校での出来事など、聞けば聞くほど、話せば話すほど、楽しい記憶が蘇ってきました。

すごく寒い中話していましたが、寒さなんて忘れてしまうくらい楽しくて、心温まった時間となりました。

大変な状況の中で見つけた温かさは、いつもの日常で見つけるよりも、数百倍、数千倍、数万倍温かく感じることができました。

復興作業をするときは、たくさんの方々に関わることができ、地域の繋がりが改めて大切だと感じました。

私が見た限り、皆さんは笑顔で協力して作業をこなしていて、より一層絆が深まったような印象を覚えました。

笑顔を見ると嬉しくなるし、協力した時の感謝の言葉は人々を幸せにすることができるものだと思います。

辛くて、しんどくて、くじけそうな時でも、諦めてはならないと強く思いました。

どんなに過酷な状況でも、笑顔さえあれば楽しいし、幸せなんだと感じました。

お互いに励ましあって、笑顔で乗り越えられたから今、私の地元は復興が進んでいるのだと思います。

今回の出来事は、大きな影響を広範囲に与え、人々の心に、大きく傷をつけたものかもしれませんが、私はそれ以上に、温かさや協力することの大切さを心に残すことができました。

悲惨な出来事だったと記憶するのではなく、たくさんを知ることでできた出来事だったと記憶するほうが少しは傷が癒えるのではないかと私は思います。

私は、このような出来事を笑顔で乗り越えられた東海村という地元を大きな誇りとして生きていきたいです。

# 東日本大震災

山崎 紀子

いつもと変わらぬ仕事の作業の中で、突然起きた地震。今まで経験した事のない大きな揺れに何が起きたのか分らず、しばらくは放心状態でした。

真っ先に子どもたちの安否が気になり、携帯で連絡を取るも繋がらず、急いで学校に向かうも所々の道路が通行不能になっている惨状を見て、ただ事ではないと瞬間的に感じました。しかも、普段ならば5分程度で行ける距離でありながら、あの時は20分程かかりました。

いつもなら大学に行っている長女はこの日、卒業生講話の依頼を受けていて次女の通う東海高校にいたのですぐに安否の確認ができ、幸いにも一緒に帰宅することが出来ました。しかし、まだこの時はこれから私達家族に降りかかる苦難を予想もしていませんでした。

自宅付近の崖が地震によって崩れ危険だという事で出された避難勧告書を目の当たりにした時には、先が見えない不安感でいっぱいになりました。

一週間のコミュニティーセンターでの避難生活後、主人の会社の宿舎での避難生活が続く中、震災から8カ月が経とうとしています。何の解決策もないまま未だに避難勧告の解除が出されていません。岩手県や宮城県の人達のように津波で家が流されたわけではなく、家があるのに自宅に戻りたくても戻れないという辛い思いをしているのは私達家族だけではありません。

この震災は、今まで過ごしてきた当たり前の日常を私達から奪っていきましたが、全てを失ったわけではありませんでした。そう思える事が出来たのは、一時はバラバラになりかけた家族の絆や、“もうどうでもいい”と投げやりになっていた私達を支えてくれたかけがえのない大切な人達からの励ましの言葉のおかげだと思います。

みんなの言葉は私達を前向きにさせ、決して諦めてはいけないという事を気づかせてくれました。そしてそれが生きていく糧になり、頑張っていこうと思える希望の光となりました。

この経験を活かして、これからの人生に役立てていければ良いと思います。



舟石川コミセン

提供：泉 幸男

